校友時報

平成18年7月21日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塚2番1号
秋田県立能代商等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

第47回 能高祭 comidiot

~Let's go crazy and make merry during the summer days~

去る七月一日・二日、本校最大のイベントである「能高祭」が開催された。雨降りではあったが、大いに盛り上がった二日間だった。

今年の能高祭は、準備期間が例年と比べて短かった。そのためHRデコは、生徒公開直前にギリギリ仕上がったクラスもあったようだ。

5. 4. 3. 2. 1　退場!!

一日目

開祭式で、鈴木健大実行委員長の「ハッスルハッスル」のかけ声とともに、第四十七回能高祭が盛大に幕を開けた。今年から、四つの文化部による発表が行われた。はじめに演劇部による舞台が披露された。彼らのクオリティの高さや、場面にあった効果的な演出に全校生徒が大いに感銘を受けた。

続いて放送部の発表が行われた。放送部は、今年の夏全国大会に出場することが決まっている。アナウンス部門、朗読部門、テレビドキュメント部門それぞれみごとな内容であった。三番目は、弁論部による公開ディベートである。テーマは、「日本は道州制にすべきか否か」、肯定側、否定側、一歩も譲らぬ論戦が繰り広げられ、会場からはどよめきの声も上がった。最後に吹奏楽部が「となりのトトロ」のみごとな演奏で文化部発表の有終の美を飾った。午後は各クラスの工夫が凝らされたデコが私たちの目を楽しませてくれた。三時十五分から体育館でいよいよ待ちに待った中夜祭が始まった。恒例のクラス対抗のど自慢が最初に行われた。今年も退場マンに担ぎ出される男達が多数いて、その度に場は盛り上がっていた。特別企画の「叩いてかぶってじゃんけんぽん大会」は、緊張感のある白熱した試合が繰り広げられていた。このように楽しかった中夜祭だが人知れぬ苦労もあった。中夜祭の責任者である三F山谷彩夏さんに話を聞いてみた。「投票やCDの集まりが悪かったり、リハーサル時間が短かったりと不安なことも多かったけれど本番では、みんなのステキな笑顔が見られて良かったです」と話してくれた。恒例の先生方のバンド演奏は、ほぼぶっつけの演奏にもかかわらず、格好いいベースとボーカルを聞かせてくれた大倉先生をはじめ、先生方の熱演に生徒の興奮も冷めやらぬ内に一日目が幕を閉じた。

二日目

二日目の一般公開も引き続き大雨の中ではあったが、それにもかかわらずたくさんの人が本校を訪れ大いに賑わった。

一般公開終了後、三時から能高祭のフィナーレを飾る後夜祭が始まった。今年の後夜祭は雨のため変則的なスケジュールで行われた。高塙ジャンピングは体育館で開催され白熱した試合が繰り広げられていた。少し雨が止んだのでフォークダンスは屋外で行われた。また部活対抗のど自慢には、予想以上に猛者達が集い退場マンの出番が一日目と比べて少なかった。やがて七時をまわり花火が打ち上げられる頃には、再び雨が降り出したが、皆どこか晴れやかな表情をしていた。

HRデコ・ムービー・壁新聞・総合の結果と、責任者並びに実行委員長に今年の能高祭の講評を聞いてみた。

〈HRデコ部門〉

三Gと三Aが同点で最優秀賞だった。今年のHRデコについて責任者の三G畠山大君は、「準備期間が短かったが、どのクラスも質が高く、みんなの努力が伝わってくるHRデコでした」と話してくれた。

〈ムービー部門〉

最優秀賞は二Cだった。責任者の三D三浦功陽君は、今年のムービーについてこう話してくれた。「全体の質は高いが、物語性が低いクラスが多数見られたために、今後は映画という一つの作品を作ってもらいたいと思った」

〈壁新聞部門〉

新聞は、二Fが最優秀賞を取った。責任者である三C吉田竜也君は今年の壁新聞について「二年生のレベルが非常に高く、来年に期待のもてる結果だったと思います。スバラシイ!」と絶賛してくれた。

〈総合〉

今年の総合優勝は三Aだった。そこで三Aの強さの秘密を担任の大倉先生にうかがってみたところ「主な勝因は目標が明確であったこと。またのど自慢での優勝が一番大きい」と笑顔で話してくれた。

最後に能高祭全体の講評を実行委員長鈴木健大君に聞いたところ「生憎の雨だったが、それを気にせず盛り上がってくれたので、無事に成功することができた」と満足気であった。

3 A KINGDOM OF CARIBBEAN

一番美しい光景

生徒会長　石田裕丈

今年の能高祭は成功だったのだろうか。もちろん、成功ということが出来るだろう。しかし、学校祭が失敗したと言う例は聞いたことがない。終わって考えてみると成功させるのは、生徒会長としての最低限のノルマだった。今年の能高祭は、一言で言えばチャレンジである。多くの新しい試みをした祭だった。文化部発表を代表とし、運営などの細部にわたって様々なことに挑戦してきた。

今年の能高祭で最もうれしかったのは、全校で楽しむことが出来たということだ。三年生だけでなく、一・二年生も今年の能高祭を楽しんでいたという印象が強い。HRデコなど各部門で二年生がたくさんの賞を取っていたということは非常に喜ばしいことだ。

又、今年はあいにくの天気で、後夜祭を体育館でやることになったが、多くの人達のおかげで、フォークダンスを行うことが出来た。本当は辛い作業のはずなのに、なぜだかみんな笑顔で楽しそうに雨水を取り、それを見た時には、胸にこみ上げてくるものがあった。周りから見るとどのように映ったかわからないが、僕にとって、最後に打ち上げた花火よりも、今年の能高祭の二日間で一番美しい光景だった。個人的な事になるが、みんなが楽しそうに踊っている姿を見て、一人横で泣いてしまった。努力した甲斐があった。高校生活最後の能高祭を最高の盛り上がりで終わることができて、全校生徒のみなさん、先生方には大変感謝している。例年に比べ、準備期間が短いにもかかわらずこの様な結果を残すことが出来たのは、本当に全員が協力して作業をすることが出来たからだ。後輩達、特に二年生は、文化部発表の時間配分など今年出た課題を克服し、今年の能高祭以上の盛り上がりを見せて欲しい。さらに、多くの意見をぶつけ合い、たくさんのアイディアを出し、新しいことに取り組んで欲しい。汗をかきながら、学校中を走り回ったあの忙しさがないと思うと少し寂しいが、この二日間は、自分にとってかけがえのない財産として、生涯いつまでも胸の中に残しておきたい。

学力向上のために

進路指導主事　藤原孝一

能代高校の夏休みを確認しておきます。一・二年生には、前期に十日、後期に三日の夏期講習があります。それに加えて、三年生には中期に十日の講習があります。そして最終日には、今まで培った力を試すための全国模試が組まれています。これが能代高校の毎年変わらぬスタイルです。

学力向上の第一の秘訣は、規則正しい生活を送ることです。夏期講習を設定している理由の一つがここにもあります。その上で、今までの模擬試験や定期考査を基に何をどうすべきか反省し、それを克服するための計画をきちんと立てて下さい。これが第二の秘訣です。これは小学生の時から言われていることと何ら変わりがありません。問題はそれができるかできないかにあります。計画を実行するときには「まあいいか」という甘い気持ちを捨てることです。

この能力を持った人材が必要とされています。計画を立て、実行し、成績が伸びなければ問題点を更に探し出して計画を立て直す。これは社会人としての訓練も兼ねています。

しかし、三年生にはこんな思います。一人で悩まず、多くの先生方に相談して下さい。能代高校も進学校なのですから、受験指導の経験豊かな先生が多くいます。

みんなは能代高校生です。そして能代高校は勉強しなければならない学校です。夏休みに何をしなければならないのか。おのずと答えがわかると思います。

「為せばなる　為さねば
成らぬ　何事も
成さぬは人の　為さぬなりけり」

あと実行あるのみです。甘えを捨てて頑張りましょう。

社会人になると、セルフマネージメントが大切になります。特に「主体的に考えて、行動して、検証できる」という能力が要求されますが、この能力は意識的に訓練しないとできないと言われています。そのため、今や多くの企業で悠長なことを言っていられません。全国の多くの進学校が「一日に十時間、夏休みには合計で三百時間勉強をしなさい」と言っているからです。であれば、何で勝負をして学力の差を埋めるのか。勉強の質と計画の効率性しかないと思います。

青春の碑 能代高校の記憶

昨年本校は、創立80周年を迎え新たなる歴史の一歩を踏み出した。それにちなんで、今年9月に以前本校が建っていた樺子山（現在の文化会館）にある「青春の碑」に新しく碑文が設けられることになった。

「青春の碑」とは、大正10年の創立から昭和49年に現在の高塙に本校が移転してくるまで50年間、約1万2千名の同窓生を見守ってきた思い出の地に、昭和57年「多感な青春時代を過ごした思い出深い学舎の地を、何らかの形で残そう」と19期生中心の発案で同窓会によって建立されたものである。

このような能代高校の歴史と同窓生たちの熱い思いのこもった「青春の碑」を、生徒の皆さんは一度でも見たことがあるだろうか。ないのであれば、ぜひ足を運んでみることをお勧めする。

ブロークンウィンドウズ理論 落書きに潜むリスク

あなたは、「ブロークンウインドウズ理論」を知っているだろうか。ポイ捨てなどの小さな犯罪を取り締まることで、殺人などの大きな犯罪の誘発を防ぐことができるという理論である。

先頃本校の管理棟一階、化学室前の男子トイレでスプレーによる落書きが発見された。

生徒指導部長の斎藤先生にお話をうかがってみたところ「様々な原因は考えられるが、つい出来心や安易な気持ちでというのが一番の動機ではないかと思う。しかし、このような単純な理由ではなく学校や社会からのストレスが背景にあるのだとしたら注意が必要である。もし悩み事や不安があるのであれば各々一番話しやすい先生に相談してみてはどうだろうか。そして安易にやってしまったのであれば、もう少し自らの行動を顧みて、能高生としての在り方を考え、自己実現に努めてほしい」と話してくれた。

つまりこの事件は、まさに「小さな犯罪」なのであり、放っておくと大きな犯罪を誘発する危険性を孕んでいる。たとえ落書きでも、とても許し難いものなのである。

三角点

昨年は、終戦から六十年となる節目の年だった。戦争の悲惨さや平和の尊さを改めて感じることができる一年だったと思う。戦争で失ったものはたくさんあるだろう。家財や家族、友人そして青春。その青春を今年の三月に取り戻した人達のことを皆さんは知っているだろうか。▼終戦間近の混乱などで、卒業証書を受け取れなかった旧制能代中学校（現能代高校）十七期生八人のための卒業式が三月一日に、本校で六十一年ぶりに行われた。出席できたのは三人だが、授与された卒業証書に、一度はなくした青春と苦難の時代とを振り返りながら喜びと感慨に浸ったそうである。その後、卒業生は学校の敷地内に「しだれ桜」を記念に植樹した。また、県外におり卒業式に参加できなかった五人には、後日卒業証書が郵送された。この六十一年ぶりの卒業式は、前校長である菊谷一先生等の粋な計らいによって実現した。▼日本が戦争をしていた時代を私たちは、本や映像でしか知らない。とりわけ秋田は他県と比べても被害が少ないように思われがちである。だが、戦争の代償は人や物ばかりではない。卒業式に出席した三人は卒業証書がなかったため、戦後の学歴社会の中で「中退」という大きなハンディを背負ったという。そのせいで、夢を諦めるしかなかった人もいる。▼それに比べ、私たちはどれだけ恵まれているのだろうか。すくなくとも、時代のせいで夢を諦めることはないはずだ。このことを幸せに思い、能代高校生として日々自分の夢に向かって努力していこうと思う。

能高生の意識傾向

壁新聞に見る学習心理

今年も能高祭の壁新聞部門は、力作揃いで、読む側にとって非常に得られるものが多かった。そこで私たちは全クラスの新聞を読み比べ、各学年の学習に対する意識傾向を調べてみた。

はじめに一年生に見られる傾向について、先月初めての定期考査を終え、その反省、これから何をすべきかなどの学習の方向性を示した記事が目立った。

一Bは、クラスの生徒にアンケートをとった結果「考査の勉強を計画的にできなかった人」は七割であった。計画的にできなかった理由は、「家に帰ると寝てしまい、部活と勉強の切り替えができない」「何を勉強したらいいのか分からない」などであった。そこで対策として「とりあえず読んでみろ」と「音読」を挙げている。最終的には、「勉強は当たり前のこと、コツコツ続ければよい」とまとめられている。また一Cは、「大学受験のために現時点からすべきことは」という切り口で結局のところ「コツコツ学習する習慣を身につけること」と結論づけている。

要するに、入学して三ヶ月経って高校生活に慣れてきた一年生には、「部活が大変だが今から大学入試を見据えて少しずつでもコツコツ勉強していこう」という堅実な姿勢がみられる。

次に二年生。一般的には「中だるみの時期」と言われているが学習に対してどのような意見を持っているのだろうか。

二Fは、自分たちに最も身近な「朝学習」を取り上げている。アンケートの結果八～九割の二Fの生徒が必要性を感じている。その理由は勉強時間が効率的に増やせるためだと言っている。しかし小テストは毎日行われるため、その場しのぎになりがちであると問題を提起している。藤原先生の「小テストは日々の学習習慣をみるものであるから、コツコツやることの大切さを知ってもらう手段」との談話から、本来の朝学習の意味を確認し、教師の思いを正しく理解し、朝学習の時間を上手に利用すべきだと論じている。

二年生は、学習に関する記事が少なく一定の傾向を見いだすのは難しかった。しかし、これから部活動や生徒会でも中心になり、うまく時間がとりづらくなってくる。その中で、「朝学習」という固定された時間をうまく使おうと言う態度が示されている。

最後に三年生は、これから受験に向かうということで、気持ちの在り方や勉強の方法、生活リズムの改善などを提案している記事が多かった。

特に三Cは、本校の校是である「文武両道」の意味を再確認し、三点固定という生活リズムの基本を示している。「自己管理のテクニックを向上させ自己実現を目指す」という結論には、一、二年生へのアドバイスの意味も含まれているのだろう。また三Cの「本物の高校生になるためには」の記事では、進路目標達成のために最適な学習方法を挙げ、本物の高校生の理想像を示していた。三年生は、受験生としての在り方や心構えを考える傾向が強いようだ。

以上の記事より確実に本校の傾向と言って良いものは、大学受験を真剣に考える姿勢がどの学年も強いということだろう。本校が進学校であることへの生徒の認識の強さがうかがえる。だがその反面「何を勉強すればいいか分からない」等の勉強に対する自主性に欠ける生徒や小テストの多さから、その場しのぎになっているような生徒も残念ながらいるようだ。そういう人達は、もう一度本校を選んだ志望理由を思い出してみてほしい。

図書館のススメ

あなたは図書館についてどのようなイメージをもっているだろうか。静かな場所、本がある場所、勉強する場所など、人によって様々なイメージがあるだろう。しかし、ほとんどの人は、図書館に対して固いイメージを持っているのではないか。

能代高校の図書館では、そのような固いイメージを壊すべく、様々な取り組みがなされている。例えば、漫画が置かれているということである。これは、字ばかりの長い小説が数多くある図書館のイメージを一発で取り払ってくれるだろう。また、昨年行われた活動には、テーマ別の展示や小論文のコーナー設置などがある。このように本校の図書館は、思わず足を運びたくなるような工夫がされている。その成果が一ヶ月間の貸出冊数二一八冊という数字に現れているのだろう。また、入館者は昼・放課後を合わせて一日で四十人ほどである。本を借りる人のほかに勉強に来る人も多い。静かな環境で一人で黙々と勉強している姿をよく目にする。これは、机が個人用ブースで区切られているからだ。集中して勉強するにはもってこいの場所である。

図書館は、物事を始めるときの原点となるべき場所であろう。もっと有効に活用すべきだと思う。また、図書館は資料の宝庫だ。過去の新聞記事や昔の資料が綺麗に保存されている。なにか調べものがあったら、図書館に来ればいい。最近は、インターネットが普及して、家にいても情報がたくさん入ってくるが、果たしてその情報は確かなものだろうか。やはり、新聞や本など筆者がはっきりしているほうが、信用性も高い。図書館には、確実な情報である本があり、必要ならばパソコンも使える。まさに一石二鳥である。

以上のように、図書館は私たちの生活の様々な場面で必要とされている。皆さんも、もっと図書館に足を運んでみてはどうだろうか。

〈4月～6月までの利用ランキング〉

順位	学年/組	名前	冊数
1	3E	市川寛光	64
2	3A	平川一茂	33
3	3A	秋林美佳子	32
4	2E	笠井慧也	28
5	3D	柴田苑子	26

燃えた校内体育大会

校内体育大会では、学年に関係なく一年生から三年生までが公平に戦うことができた。大きな怪我をする人もなく、三日間を安全に楽しく過ごす事が出来たのもすべて担当の先生の配慮と生徒達の頑張りがあったからだ。三年生は、最後の体育祭ということで各クラスとも、ものすごい盛り上がりをみせていた。特にサッカーとバレーボール男子では三年生が圧倒的な強さを見せつけていた。しかし、それに負けず二年生・一年生ともに各種目で一生懸命頑張っていたように見えた。ある意味で、能高祭以上に全校生徒が一致団結できた期間だったのではないか。

今回の校内体育大会について清水先生にお話を伺ったところ、「二日半の体育祭となり不安もあったけれど、スムーズに進行することが出来てよかった。全学年とも完全燃焼出来たと思うので、三年生は受験勉強に気持ちよく向かうことが出来るでしょう。心配だった天気もなんとか晴れてくれて、大成功の体育祭になったと思う」と話してくれた。

●総合結果

一位　三年F組
二位　三年E組
三位　三年G組

総合優勝した三年F組の担任である桜井先生は、「体育祭を振り返ってみてやっぱり優勝できたことが一番大きかった。体育祭に向けて生徒たちは、体育館を借りたりして、毎日放課後は一生懸命練習をしていた。しかし、一番の勝因はクラスの団結力だと思う。どの会場にもクラス全員で応援に行って、試合をしている仲間のためにクラス一丸となり応援していた。一番うれしかったのは、ソフトボールで優勝した時に、生徒たちが胴上げをしてくれたこと。最後に、三年F組は最高の生徒たちです!!このクラスの担任で幸せです」と語ってくれた。

―＊―＊―＊―

●各種目の結果

・バスケットボール
男子一位　三年F組
女子一位　三年G組
・バレーボール
男子一位　三年E組
女子一位　三年A組
・サッカー
一位　三年E組
・ソフトボール
一位　三年F組
・ソフトテニス
（ソフトテニスは一クラスから2ペア出場するため、2ペアとも入賞した場合はクラスに重複して得点が入る）
一位　二年F組
・リレー
一位　一年E組
・綱引き
一位　三年E組

奮え松陵我が健児

悔いの残らないようにしたい。

★囲碁・将棋部

8月5日～6日

◎全国高校文化祭囲碁部門
三C　長谷川貴広
三G　芹田　智仁
二B　松田　大輝

8月2日～3日

◎全国高校文化祭将棋部門
三D　大塚　健

◎全国中学・高校ディベート選手権
三A　伊藤　正孝
三A　船山　夏枝
三D　柴田　苑子
二C　能登麻美子
二C　松橋　彩子
二D　児玉　駿介

「一つでも多く全国大会で勝てるようにしたい。」

★放送部

7月下旬
・ラジオドキュメント部門「愛拶」
・テレビドキュメント部門「十里の道も一歩から」
・朗読部門
三F　塚本　春菜

「周りに圧倒されないで、きたい。」

★無線部

10月14日～15日
◎全日本ARDF大会
二D　牧野　緑
二D　牧野　友花

「自分たちのベストを尽くして諦めずにがんばりたい。」

★弁論部

8月5日～7日

県予選の結果、体操部・柔道部・放送部・囲碁・将棋部・無線部・弁論部が全国大会に出場することになった。選手に抱負を語ってもらった。

★体操部

8月2日～4日
三D　佐藤　和也
二E　栗林　俊樹

全国大会出場

一A　平元　拓翔
一E　木村　学人
一F　林　大翔

「大会では自分のもてる力を全部出し切って頑張りたい。」

★柔道部

8月8日～12日
二B　椎名　香純

「一戦一戦大切に戦って

Sports Flash

今年も日本のスポーツ界は盛り上がっている。上半期のスポーツ界をまとめて振り返ってみようと思う。

まずは、一月のトリノオリンピックでの荒川静香選手の金メダル。荒川選手の得意技である「イナバウアー」がしばらくの間ブームになった。

ニュースや新聞でよく耳にする言葉の意味を皆さんはきちんと理解しているだろうか。そこで、よく聞く時事用語である、地上デジタル放送・インサイダー取引・パチスタ手術を解説していきたい。

▼地上デジタル放送（地デジ）

地上の電波塔から送信する地上波電波放送をデジタル化したもの。受信するには、対応したチューナーが必要で、既存のテレビでもチューナーがあれば視聴することができる。二〇一一年七月までには現在のアナログ放送はすべて終了し、古いテレビ放送を受信することはできなくなる。

「地上デジタル放送とは」より

▼インサイダー取引

会社の内部者情報に接する立場にある会社役員等が、その特別な立場を利用して会社の重要な内部情報を知り、情報が公開される前にこの会社の株を売買することをいう。

「東証インサイダー取引」より

▼パチスタ手術

正式には、「左室縮小形成手術」と呼ばれる。この手術は、ブラジル人外科医師が八十年代に始めた。従来の治療法とはまったく異なり、手技的には膨らんだ左心室の心筋を三分の一程度に切り取り、形を整えた後縫い縮めるというもの。日本では一九九六年十二月に初め実施された。

「パチスタ手術体験記」より

以上三つを取り上げた。理解して戴けたであろうか。

現代社会のキーワード

編集後記

今年はじめての校友時報がやっと完成した。特集記事は「能高生の意識傾向」と題して能高祭の壁新聞から伺われる「学習に対する考え方」をまとめた。これは、本校が進学校であることを再確認するためのとてもいい企画になったと思う。他にも図書館の現状や難解な時事用語の意味を取り扱った記事など読み応えがある記事が満載であると自負している。

ある時間を最後まで投げ出さずに闘い抜いた者に成功が訪れるということを示唆しているように思える。スポーツで得る感動は大きい。刻々と迫り来るタイムリミットを恐れず、一瞬一瞬を大事に果敢に闘う姿が勇気を与えるからだ。

続いて三月に行われたWBC（ワールドベースボールクラシック）での初代優勝である。王ジャパンの名を、世界に広めた忘れられない大会であろう。試合後の選手たちの喜びと安堵の笑顔は、私たちをも幸せにしてくれた。

そして、皆さんの記憶にも新しいサッカーワールドカップ。能高生はテスト期間と重なってしまったが、勉強の合間に応援した人も多いだろう。残念ながら、予選敗退という結果に終わってしまった。下半期のスポーツも今以上の活躍を期待したい。

スポーツは私たちを興奮させ感動させてくれる。だが、それ以上に重要なことを教えてくれていると思う。一点や一秒で勝負が分かれる試合がある。これは、私たちに限り